

宮崎県の生活綴方教師・木村寿

〱 南方小・岡富小・延岡小 〱

一、出発期の木村寿

〱 東臼杵郡南方村・南方尋常高等小学校 〱

1、自然観察の綴方

木村寿は、土々呂小学校での文集『光』（昭和七、八、九年）によって、当時全国的に知られた生活綴方教師である。その木村寿が、綴方教師としての第一歩を踏み出したのが、東臼杵郡南方尋常高等小学校である。大正九年に宮崎師範学校本科第一部を卒業した木村寿は、最初の勤務校である東臼杵郡北川小を経て、大正十四年三月、南方小学校に赴任した。そこで初めて一年生を受け持ったのである。大正十五年のことである。

「大正十五年、南方といふ農村で、初めて一年生を受け持った時、子供の毎日の生活に接してゐると、国語教育の重要さを痛感した。国語に力がいり、随つて綴方を丹念に見る様になつた。」（「私と綴方」『綴方実践の開拓』所収）

生徒の国語力の無さを痛感し、一年生から着実に力を付けていく必要性を感じたということである。南方に比べて北川が都会というわけではないので、農村の子どもだから国語力が無いと言っているのではない。一年生を初めて受け持ってみて、「始め」がいかに肝心か痛感したということである。基礎的な力を確実に付けておくことの重要性である。

しかし木村の言う「基礎力」は、文字力などに限定したものではない。「随つて綴方を丹念に見る様になつた」と言っているのでは

菅 邦 男

る。それも単に「文を書く力」の養成ではなく、物を見る目、観察力の養成であった。具体的には「自然観察の綴方」である。

「田舎といふ関係もあつたのか、特に自然観察の綴方を実施した。子供が、自然の懐に抱かれてゐながら、自然を観る眼が出来てゐないのを知つたからである。」

これは「自然を見る眼が大切だ」という一般的な話ではない。「自然の懐に抱かれてゐながら、自然を観る眼が出来てゐない」というところに木村寿の教育観はある。自分の周囲、環境、生活に目が行っていないというのである。自分の周囲、生活を見つめるということは、ひいては自分を見つめるということである。生活を見つめ、自分を見つめる。それによって自分の生活も生き方も変わっていく。そういう「眼」を育てたいというのである。

「子供の生活を正しくみるがための綴方、生活をよくしていくための綴方、私の綴方は、研究といふことよりも、常に子供の生活が目標であつた。」

教師の立場から言えば、それは子どもの生活を正しく把握するための綴方であつた。教師は子どもの生活を見つめ、子どもは自分の生活を見つめる、それによって子どもの生活をよくしていく、それが木村寿の綴方教育であつた。

しかしそれに止まらず、子どもの書いた綴方を全国誌に投稿したり、文集を作ったりもしていたようである。

2、文集の発行と「鑑賞文選」

「小砂丘氏などのやつてゐられた、鑑賞文選に作品を投稿して、二三は掲載してもらった。(中略) 只子供が、綴方を喜び、文集を楽しみにしてゐるのをみると、自分の労力を無条件に提供して、やつてやらう心持になつて、文集を作つたりしてゐた。」

「子供の文章が優れてゐると、いはれても、それにかれこれ価値つけて、物を言はうとは思はなかつた。雑誌にでも載ると、子供の方が喜ぶので、その喜びがうれしさに、私は投稿したのである。」

木村寿は当時の心境をこのように述べている。子どもの喜びのために作った文集は今失われて存在しないが、鑑賞文選に載った作品は一例だけ見ることが出来る。

昭和二年八月一日(一九二七)発行の『カンショウブンセン 二ネン』(『鑑賞文選 二年』)第十九号に掲載された、黒木道男の綴方「つゆ」である。

つゆ

宮崎・東臼杵・南方校

黒木道男

けさ私が学校にくるときあさ日がつて、草のつゆが玉のやうにきらきら光つてゐます。風がふいてきて、つゆがきらきらひかつて、おちました。

それから、だんだんいきよりますと、なへが、はらはらゆれて、なへの水が、ちよぼつとおちました。それからだんだんいきよりますと、ちよぼつとしたむぎのいがに、又つゆがきらきら光つて、でんきがついてゐるやうにきらきら光つてゐます。あつちの方にも、こつちの方にも、むぎのほのいがに、ぴかぴかつとひかつてゐる。それからはしにきました。はしを通つていきよりますと、ちやのはにつゆ水がたまつてゐます。それからだんだん行く学校にきました。

学校にきて見ますと、学校のせんだんの木にも、つゆがたまつてゐました。家の中にはいろいろとしたら、つゆがぼてつとおちてきました。それから家の中にはいつて、さんじゆつをかきました。

低学年の子どもにしか書けない魅力的な文章である。「それから、だんだんいきよりますと」「それからだんだんいきよりますと」「はしを通つていきよりますと」「それからだんだん行く学校にきました」「それから家の中にはいつて、さんじゆつをかきました」といったたみかけるような繰り返しは、昔話の語り口を思わせる。「いきよりますと」という延岡方言の言い回しが、独特の味わいをもたらしている。

木村寿の言う「自然観察の綴方」そのものである。露そのものをじっくり観察するのではなく、登校中に見た情景の中の露を描写している。自宅から学校までの道のりを漠然と歩くのではなく、何があるか、見えるか、変化しているか、観察しながら歩いている。通学は児童にとつて生活の一部である。自宅から学校までの道のりを見つめることは、生活を見つめることでもある。

「つゆ」の作者、黒木道男氏によると、学級文集は、毎月だったか、四半期に一冊くらいだったかの割合で出ていたようである。文集名は『星のむれ』『赤い鳥』である。青や赤色の表紙が付けられており、『赤い鳥』は当然赤い表紙であった。木村寿の「北原白秋」への関心が伺える。木村は雑誌『赤い鳥』へ童謡を投稿し、選外佳作になっている。土々呂小時代には子どもたちの詩を『赤い鳥』に投稿して掲載されている。アルス版白秋全集も所蔵していた。青木幹勇氏は、当時木村の家で白秋全集が並んでいるのを見たと言言している。白秋への深い関心が、『赤い鳥』という学級文集名になつてあらわれたのであろう。

当時は男組女組それぞれ一学級で、男組は六十名くらいだったが、

木村寿はクラスの全員に綴方を書かせ、ガリで刷って全員に配っていた。綴方には赤ペンで「評」が書かれていたが、文集にも、一人一人の綴方に評が書いてあった。評とは言ってもほめ言葉で、「よく目を見開いて、よく見てきたねえ」といったものだった。「自然観察の綴方」の評である。

こうした「評」付きの文集は、全国的にもまだまれだったようである。

佐藤茂は「文集とその系譜」（『生活綴方と作文教育』昭二七金子書房）の中で、「文集の発展過程」について述べている。

(1) はじめは詩と文ぐらいに分けて、漫然とならべた文集が多かった。(略) まだはっきりした指導意識を持たず、とにかく子ども作品を大事にし取りあげてやろうという素朴な気持ちからスタートしたからであろう。

(2) だんだんと評語、文話を加えたものが出てきた。

『葛城』一九号(秋田県湯沢小学校)は昭和五年にもう詩の特集を出し、その批評座談会ものせていた。『ふきのたう』(昭六)は一つ一つの文に批評をつけ、詩の合評をしている。

これによると、評語や文話を載せた文集が発行されるのは、昭和五年頃からのことである。木村寿が南方小学校で文集を発行したのは、大正十五年から昭和二年一学期にかけてのことであるから、木村は全国的に見てもかなり早い段階から指導意識を持って文集を作っていたことになる。木村寿の先見性を示すものである。

3、木村寿の綴方指導

綴方は宿題としてではなく、学校で書いた。

黒木道男氏は木村寿の綴方指導について、「一時間なら一時間、

どんな事でも良いから自分の好きなことを書けと言った。子どもたちは「喧嘩したこと」なども書いた。字を訂正したりする程度で、綴方を訂正されたことはない。方言を使うなどは言わなかった。ありのままを書けと言った」と言っている。その結果、文集には学級の子ども全員の綴方を載せることができた。

しかしこれは、木村寿の厳しい指導の成果だった。厳しすぎて、綴方を書くことは、生徒にとって「あまり楽しくはなかった」ようである。

黒木道男氏によると、綴方は強制的で、子どもが「書かれん」(書けない)と言っても書かせ、その子は泣きながら綴方を書いてきた。とにかく二行でも三行でも書かせたそうである。

木村寿の学級では、一年生の時から習字をやった。教室に丸いテーブルが置いてあって、用紙が用意されている。子どもたちは筆と墨、下敷きを家から用意してくる。用紙は先生が準備していた。一枚ずつテーブルに取りに行かせて書かせるのである。用紙を四つに折り、「ハナハト」といったように四文字をカタカナで書く。木村寿は子どもが書くのを側で見ている、字が悪いと取り上げ、破りすてた。「あれだけ言ったのに、まだ分らんのか」と怒られて、子どもは泣きながら用紙を取りに行く。黒木氏も、泣きながら取りに行ったことが何度もあるそうである。文字通り子どもの手を取って教えてくれたが、「一年生の終わり頃は相当なものだった。」「寡黙な先生で、たたきはしなかったが、そういう激しさ、気の短さがあった。厳しかった。」と黒木氏は言っている。それだけ真剣だったのである。

後に木村寿は、「あの時、綴方がうまうまかかったら教師を辞めようと思っていた」と、黒木氏に語ったそうである。教師としての資質があるか無いか、自分を見極めようとしていたのである。

そうした厳しい指導の一方で、木村は音楽や絵が好きで、子ども

たちによく唱歌を歌わせたり写生をさせたりしていた。黒木氏は色々な童謡を木村寿から習ったと言っている。「子どもの村は子どもで作れ。みんなで住もうよ」といった歌も習った。「その頃は『軍人大好き』といった感じだったが、そういうのはいっさいやらなかった。」と黒木道男氏は言っている。こうした世相に迎合しない姿勢が、木村にはあったようである。歌は北原白秋の「子供の村」である。

文字の指導は、習字の指導を一年生からやっていたくらいであるから、かなり早くからやっていたはずである。黒木氏は、「自分は学校に上がる前にカタカナを書けるようになっていたので、いつ頃他の子どもたちが書けるようになったのかははっきりしないが、二期からは習字（毛筆）をやっていたので、一学期の終わりにはみんな書けるようになっていたと思う」と言う。いずれにしろ、文字の習得を早めにやり、綴方にかかるということである。

このことについては、岡富小学校時代に同僚だった青木幹勇氏が、その著『わたしの授業』（明治図書）の中で、次のように述べている。

「だれもが知っているように、あのころは、カタカナ先習でした。ひらがなは、ちょうど今のカタカナの学習と同じように、一年後期から、ぼつぼつ指導を始め、二年生の一学期で一応、仕上げるという、カリキュラムだったので。」

ところが、木村教室では、カタカナは一学期に終了、二学期からは、ひらがなのけいこ、そして、二学期の終わりには、大半の子どもが、ひらがなの読み書き、もちろん、作文も書けるという状況でした。」

これは南方小の次に木村が教鞭を執った岡富小学校での話だが、黒木道男氏の話と一致している。黒木氏は生徒の立場から、青木氏は同僚教師の立場からの証言である。

また青木氏は続けて、

「他は、おして知るべし、理科でも、音楽でも、体操、手工まで、まんべんなく、その指導に情熱を傾けたのです。木村さんの指導の本命である、作文ピラミッドを高くするには、その、底面積を広げなければなりません。木村さんは、それを十二分に見通しておられたのだと思います。」と述べている。

生徒の目には木村先生は音楽が「好き」、絵が「好き」と映ったことも、同僚教師の目から見れば、綴方につながる指導だったのである。

木村寿自身「綴方の作業をするために、一日の教科一つでもおろそかにはしなかった。かへって、他の教科に精神を集中した。せずにはゐられなかつた。綴方が、算術もしつかりやれ、絵もしつかりやれと命じてくれたのだった。」（『綴方実践の開拓』）と言っている。青木氏の言う「作文ピラミッド」である。木村寿は作文ピラミッドを高くするには何が必要か、「十二分に見通して」いたわけである。

生徒に厳しかった木村寿は、自分を律することにも厳しかった。黒木道男氏は「先生は一番早く学校に来て、子どもの机を拭いていた」と言っている。黒木氏は家が遠かったので朝早く学校へ行っていたが、学校に着くと、必ず木村先生が来ていて「黒板や生徒の机を全部拭いていた。それで自分も一緒に床の掃除などをした」そうである。木村寿の独身時代である。

木村寿の謹厳実直さについては、青木氏も黒木氏と同様のことを言っている。

木村さんは、子どもにきびしいことの数倍自分にきびしい教師でした。これも、木村さんに対してもつ、わたしの尊敬のひとつです。木村さんの目に映る、サボる教師、ダラシない教師、すじを通さな

い校長には、ときにづけづけと批判、忠告をとばしました。

三十幾人かの職員中、木村さんの出勤は断然、早い方でした。しかもそれが、およそ八Kの、道を歩いての出勤なのです。学校のすぐそば、運動場のはずれといった所に下宿していたわたしが、そこらぶらつきながら歯を磨いていると、木村さんは、もう出勤なのです。わたしのダラシなさを見かねてのことだったでしょう。あるとき、「子どもの登校したあとから、のこの教室にやってくるようではだめだ。早く出勤していて、教師の呼びかける『おはよう』で、子どもを迎えるようではなくちゃあ。」と、きつくたしなめられたことがあります。

この頃青木氏は文検の受験準備中で夜遅くまで勉強しており、決して怠けていたわけではないのだが、木村寿はそれを知らなかったのである。しかし青木氏も、登校した木村寿が黒板や子どもの机まで掃除しておくような人物だったとは思わなかっただろう。

青木幹勇氏は「木村寿氏の作文教育が、狭い、作文指導でなかったことは、木村さんを知り、木村さんの業績を説明するうえに、だじじなポイントだと思えます。」と指摘している。

「木村さんの作文教育は、文字通り教育であって、小学校教育に対する深い洞察に立ち、広い実践の裾野をもったものでした。その実践の軸心に作文があり、その作文指導の成果が、文集『ひかり・光』として実っていったというべきでしょう。」

作文があれだけ作れる子どもを育てるには、文字力、筆写力、発想、推考力といった、作文プロパーの能力はもちろん、読解力、直観力、さらには、感受、感動の心情を培うという、指導もなされていなければならないはずだ。

事実、木村さんは、そういう、作文、ないしは、表現の素地になるような、基礎指導を徹底的にやっていました。」

作文を知り、木村寿という人間を知る人物故の的確な指摘だといえよう。そしてこうした総合的な綴方指導は、初めて一年生を受け持った南方小学校時代から、すでになされていたのである。

4、「鑑賞文選」への入選

後に、数多くの作品を全国誌に入選させることになる木村寿も、当然の事ながら南方小学校時代にはまだ入選作品の数は少ない。黒木道男氏は綴方「つゆ」のことは覚えていないと言っているが、「家で養っていた(生産していた)サラブレッドに飼いの葉をやる様子を綴方に書いたらそれが挿絵付きで雑誌に載り、賞品をもらったことがある。『鑑賞文選』だったと思うが、はっきりしない」とも言っている。「鑑賞文選」等の雑誌が残っていれば、もっと多くの入選作品を見い出すことができるのかも知れない。

綴り方の入選者は黒木道男氏一人で、雑誌に載った時は、全校集会でそのことが報告されたという。

詩の方では、『日本の子どもの詩 宮崎』(日本作文の会編)に南方小の子ども作品が三編掲載されている。いずれも「片寄静一」という子どもの詩である。

テッポウ

片寄静一

小1

カリウドガ

目ノ ニキニ ウッタテテ

ドロント ウチマシタ

トン トトン トン トトン

ドコカデモナル

テッポウノ オトハ オモシロイ

テッポウノ オトガ ヤマニヒビク

ドロン ドロン
テッポウノ オトハ、イサンデル
アンマリ ハバシカラ
ミミガトウクナル

東臼杵郡南方校

水たまり

水たまりに、
木と家がうつつた。
空が青くうつつた。
木がゆれると水の中でもゆれてた。
うつつた空も家も
ゆらゆらゆれた。

片寄静一

小2

東臼杵郡南方校

なみ

海のなみが小さくて
小さく光りがうつつた
なみに風ふいて
ゆらゆらなみがゆれた
なみざあばり うちあげた
むかうの海が
ぴっかりぴっかりひかっていた

片寄静一

小2

東臼杵郡南方校

『日本の子どもの詩 宮崎』には出典が明記されていないので、
どの雑誌にいつ掲載されたのかは不明である。しかし黒木道男氏に

よると、片寄静一は南方小学校の一、二年生の頃の同級生というこ
となので、木村寿の指導作品である。木村寿は最初から詩と綴方の
両方を指導していたのである。

5、綴方指導への理解と無理解

黒木道男氏によると、こうした木村寿の綴方指導をめぐって、保
護者とのトラブルもあったようである。中には、綴方ばかりやって
いると子どもの成績が悪くなるばかりだと怒鳴り込む親もいたので
ある。しかし木村寿はそんなことには無頓着であった。

木村寿の岡富小への転勤は、二年生の二期期だった。南方小学校
の『創立八十周年記念誌』の「旧職員名簿」にも、「木村寿 T、
14・3・S、2・9」とある。二期期からの転勤である。転勤に
伴って、当時の保護者六、七人が子どもを連れて「お世話になった」
と、別れの挨拶に行ったそうである。木村寿の綴方指導を是とする
理解者もいたのである。黒木道男氏の父親も、文集が出ると手に取っ
て読んでいた。

黒木氏によると、木村寿が転勤した後は、以後卒業するまで綴方
の指導はなく、文集も出なかったとのことである。指導者が去れば、
そこでの綴方教育は途絶えてしまうのである。木村寿の個人的な綴
方指導だったからである。

6、黒木道男氏と木村寿

（ながく薫陶を受けた木村先生）

平成十五年十一月、黒木道男氏にお会いすることが出来た。八十
四歳のご高齢だが、お元気で、記憶力もよく、当時のことや戦争中
兵士として前線に出たときのことなど、興味あるお話を楽しく伺う
ことが出来た。延岡市の助役だった方である。

黒木道男氏は大正十五年四月に南方尋常高等小学校へ入学。木村

寿が担任した最初の一年生である。習ったのは南方小の一年生、および二年生の一学期のことだが、木村寿はその後もながく「薫陶を受けた」先生だった。

黒木氏は、昭和七年三月、南方尋常小学校を卒業すると、県立延岡中学校に進学した。二年生の時、十日間ほど、木村先生宅に泊まり込んで中学校に通ったことがあるという。永田（現・松山町）の家から学校までは遠く、歩いて一時間二十分の道のりを通っていた。寒稽古の時など、朝七時から始まるので、五時頃には家を出なくてはならない。それを見かねて、木村寿が自分の家から通うように言ってくれたのである。三年の時には自転車を通ったので、木村先生宅に泊まり込んだのは二年生の時だけである。当時木村寿は結婚しており、「奥さんも先生だったので、鍵を三個にし、それぞれ鍵を持って家を出た」そうである。

延岡市役所の課長だった頃、退職した木村寿が社会教育課の係長（囑託）でやって来た。「自分は課長で先生より上だったが、教え子なので、子ども扱いだった。」と黒木氏は笑っておられた。その後、木村寿は椎葉村の教育長に転出するのである。

このように黒木氏は長期にわたって木村寿と接触のあった方である。後年、木村寿が宮崎を去る時、送別会の席上で、厳しかった習字の時間（南方小学校）のことを話すと、隣に座っていた木村先生は、こそこそ逃げ出したそうである。

なお、木村寿は黒木道男氏が小学校を卒業するときに、教師に向いているから師範学校を目指すようにと勧めている。意に背いて旧制中学校に進むと、今度は中学校の卒業時に、師範学校の二部を受けるように再度勧めたそうである。自分と同じ教職の道を歩ませたい素質ある生徒だったのだろう。

木村寿の教師像、人間像を物語るエピソードである。

二、岡富小学校の文集『日の光』

昭和二年十月、木村寿は三番目の勤務校、東臼杵郡岡富村岡富尋常高等小学校へ赴任した。生徒数一二九八名、学級数二五の、東臼杵郡の中では大規模校である（岡富村は、昭和五年四月一日に延岡町と合併している）。

岡富小でも木村寿は文集を発行した。

『綴方生活』第三巻第二号（昭和六年二月一日 郷土社）では、小砂丘忠義が「文集展望」の中で「文集を作ることも綴方の一つの作業と見なして、すつかり子供の手で作り上げるやうになりたいと僕は思ふ。」と述べ、木村寿の文集を例に挙げている。

「全然子供の手で作るのではないが、例へば宮崎県岡富校の木村君のやつてる『日の光』は表紙絵から挿絵すべて子供（二年生）の手になるものである。」

道具さへ貸してやれば、子供は自分らで編集会議を開き、原稿募集のポスターを作り、字を書く人、挿絵をかく人、製本をする人といふやうに手分けをしてやつてゆく。」

木村寿は岡富小時代にも文集を作り中央に送っていたのである。文集名は『日の光』、一年生の担任である。「文集展望」は昭和六年二月一日の発行であるから、ここで言う文集『日の光』の発行は昭和五年のことであろう。「表紙絵から挿絵すべて子供（二年生）の手になるもの」という方針は、以後の文集でも引き継がれている。土々呂小の『光』に先立って、岡富小で既に「光」という言葉が文集名に使われているのが注目される。

岡富小に居たのは昭和五年までである。六年には延岡小に転勤になっている。南方小で初めて一年生を持ったのが大正十五年だと言っているから、五年くらいに間に、「文集展望」で引用されるほどに知られるようになっていたのである。文集『光』に先だって、かなり早くから木村寿の名は知られていたのである。

文集『日の光』は見つかっていないが、岡富小の作品は、当時の雑誌『綴方読本』（小砂丘忠義編集発行 郷土社）に掲載されたものを幾つか見ることが出来る。指導者名はないが、小砂丘忠義の「文集展望」によれば、昭和六年二月一日（『綴方生活』第三巻第二号発行日）段階で二年生の担任であるから、昭和五年度の二年生の作品は木村寿の指導作品である。

※『綴方読本』昭和五年十月号

「文の研究」 尋常二年

木のゑ

宮崎県延岡町岡富小学校

池田良雄

ぼくが、べんきやうしよつたら、ひさみが来て、それをかせ、それをかせ、といひましたから、それた何か、と ぼくがいひますと、それよといひました。又、それた何かとぼくがいひますと、又、それよと、いひました。

何か、このえんぴつか、といひますと、ん、といひました。えんぴつをかしましたら、何をするのかとおもつて見てゐましたら、こちらの紙をひろつて来て、木のところを書きよりました。木を書くのか、木ならぬ、かう書くのだ、とをしへますと、ん、といひつて、又木のゑを書きはじめました。

見てゐると、どうしてもうまく書きませんから、又をしへてやりました。するとひさみは、ちがふえんぴつで、ぼくが書きよる紙に、又書きました。

ぼくは書くのがすんでしまつて、えんぴつをおきました。するとひさみも書いて、えんぴつをおきました。

二人が書いた木のゑをくらべてみると、やつぱりぼくのがうまく

出来てゐました。

かんがへました。さうじや、五つもちがふのに、ぼくの方がうまいよとおもひました。さうじや、五つも違うのだから、ぼくの方がうまいはずだと思ひました。」の意味であろう。「かんがへました。」が子ども独特の表現独特の味わいを出している。

最後の行「かんがへました。さうじや、五つもちがふのに、ぼくの方がうまいよとおもひました。」は、「さうじや、五つも違うのだから、ぼくの方がうまいはずだと思ひました。」の意味であろう。「かんがへました。」が子ども独特の表現独特の味わいを出している。まだ幼児である弟の様子と、「五歳も上なんだから」という兄としての意識がよく表れている。

この綴方は「文の研究」の素材としてとられたものである。入選した綴方の掲載欄は別に設けられているので、「木のゑ」は他の子どもの参考になる綴方と考えられていることが分かる。木村寿の指導作品は、岡富小時代にはすでにこのような扱いを受けているのである。

◆よく、この綴方を、よんで下さい。よくよんでから、下のだんをよんで、こたへて下さい。

◆よくわからなかつたら、もう一ぺん、この綴方を、よんでごらん下さい。そしてこたへは、ほかのノートに、かきつけて下さい。

(下段)

良雄くんは、兄さんで「ひさみ」といふのは、弟さんか、いもうとかでせうね。つぎのことを考へて下さい。

1、良雄くんは、ひさみさんと、なかよしでせうか、どうでせう。そしてそれは、どこでわかりますか。

2、良雄くんは、えんぴつをかしてやつてから、どうしましたか。

3、木をかくことを、をしへてやつてから、どうしてゐましたか。

4、良雄くんが、もう一ど、をしへてやつてゐると、ひさみさんも、

一しよになつて、その紙へかきだしましたね。二人が、あたまをつきあはして、書いてゐるやうすが、わかりませう。そこをよんで、あなたは、どうおもひますか。

5、ゑが、できあがると、良雄くんはどうしましたか。

6、ひさみさんは、いくつぐらゐの子供ですか。
私は、この綴方は、だいぶん、じやうずに書いてゐると、おもひます。どこがじやうずに書いてゐるのか、かんがへて下さい。どうしても、わからなかつたら、先生にでも、お母さんにでも、きいてごらん下さい。

この綴方には、良雄くんと、ひさみさんと、おはなししてゐることばが、たくさんありますね。そのおはなしのところを、かぎ「」の中に入れると、おはなしであることが、よくわかります。

「それをかせ」といひました。

「それは何か」といひました。

かういうふうに、べつのノートに、「」を入れて、この綴方をかきうつしてごらん。

問いに答えるという形での、非常に具体的な指導である。「木のゑ」を模範になる綴方としながらも、会話文に「」（カギカッコ）が使われていないことを指摘している。この指摘には木村寿ももつともだと思つたらしく、以後の綴方には「」が使われている。

児童詩では、同号に「田の中」が掲載されている。

田の中

宮崎県東臼杵郡岡富小学校

本母 宣子

田の中はいる

まめのはにつゆが
たまつてちべたい。
げたがぬれて
するするすべる。

稲を刈った後、田に「まめ」を植えたのである。当時、空豆を植えたともいうが、はつきりしない。その豆の葉の露が手に触れて冷たい、素足に履いた下駄が濡れてするするすべるというのである。豆を取りにというより、戯れに入つたのだろう。まだ田植え前の、春先のことである。

なお、『綴方読本』には「こんげつ、つゞりかたの、よくできてゐた人。」という欄があり、そこには二人の名前が載っている。選外佳作である。

お月さん 宮崎 白井 壽雄
じてん車 同 池田 良雄

池田良雄は「木のゑ」の作者である。選外佳作にも選ばれたのである。

『綴方読本』昭和六年一月号には、「すいつちよん」という綴方が掲載されている。

すいつちよん

宮崎県延岡町岡富小学校

小島政雄

あさ学校に来る時、あんどうさんところのかきは、石のいたがならべてあるから、一つ二つ三つとかぞへていそいでるます。するとその四つ目にすいつちよんがゐりました。じつとしてゐます。

そつとつかまへました。げんきがありません。
つかまへてはしりながら、学校へいそぎながら、すいっちよんを
見ると、うしろの長い足が一つとれてゐます。おやおもつて見る
と、今はしる時とれたのです。

ちんばでかわいそうにおもつて、一つの足もちぎつて草はらにに
がすと、足がないのでええとびません。
見てみると、少しづつとぶやうです。

どこでとぶのかしらんとおもつて、よく見るとはねがすこしづつ
まひながらとんでいきます。

はねがうごく、ほんのすこしとんで草の中へいきます。
そのみとれてゐるうちに、すこしづつとんで行くうちに、見えな
くなりしました。

学校がおくれたとすぐおもひついて、いそいで一しやうけんめい
がくかうにきました。

そしてつづりかたのじかんに、すいっちよんのことを書きました。

なかなかおもしろい綴方である。学校へ行きがけに「すいっちよ
ん」を見つけて捕まえたのは良いが、足がとれて元気がない。それ
で一本足では可哀想だ思ってもう一本の足も取ってバランス良くし
てやったというのだ。子ども独特の発想である。優しいのか残酷な
のか。

足がないのに少しづつ飛ぶのはなぜかと思つて観察を続ける、そ
こがまたすごい。学校に遅れるので一生懸命急いで来て、「つづり
かたのじかんに、すいっちよんのことを書きました。」という終わ
り方も独特の味わいがある。「すいっちよん」は「すいっちょ」、ウ
マオイのことである。

この綴方の観察には、南方小の「自然の観察」を思わせるものがある。「素材」は違うが、登校途中の観察という展開は「つゆ」（黒

木道男）と同じである。引き続いて「自然の観察」を指導しながら、「見る」対象が「木のゑ」などの子どもたちの生活全般に広げられたのである。

『綴方読本』昭和六年三月号には、児童詩に「あぜみち」、綴方に「かがみ」が入選している。

あぜ道

宮崎県東臼杵郡岡富小学校

村山信一郎

向ふのあぜ道

草ばかり

道があるのか

人がみえる

文字通り、見たままを書いたのだろう。草深い季節で、道が隠れている。人が通るので道があるのが知られるというのである。理屈を言えば、「道があるのか 人がみえる」というのであるから、初行に「向ふのあぜ道」と持つて来るのはまずい。草で道が見えないのに人が通るので道があるのが分かるというのだから、初行で「あぜ道」をイメージさせてしまつては後半の二行と矛盾してしまふ。題名も「あぜ道」ではない方がよい。

かがみ

宮崎県東臼杵郡岡富小学校

井上正信

僕がかがみを見てゐたら、かほがうつりました。かがみをいごかすと、かほもいごいておもしろい。外には日がたつてゐたから、ぼ

くが日の方にむけて、くらいところにうつしたら、そこがあかるくなりしました。かがみをうごかせば、あかるいところもうごいてあまりました。それで、せんだんの木からうつしたらうつりませんのかんがへてみると、ああ、くらいところにうつさにやうつらんのだといひながら、くらいところにうつしたら、うまいことうつりました。その時うちののぶあきがきましたので、かほにかがみをみせたら、のぶあきは、「ああ、まばゆいな」といひました。僕が「おれがしたとじやが」といひましたら弟は「何でしたつか」といひました。「かがみでしたつじやが」といひました。のぶあきは「僕がしてはならんどかい」といひました。僕が「なるよ、して見ね。」といひました。「したら、それをかしてみね」といひました。かしたら、ぱつとくらいところにうつりました。ぼくは、それを見て、「そうら、うつつたじやねけ」といひました。

○くらいところにうつさねば、だめです。なぜでせう。

○のぶあきくんは、きみが、かほにうつしたとき、びつくりして、これは、なんだらうと、おもったのですね。

○するときみは、のぶあきくんを、をしへてやって、かゞみをかしてやりましたね。それから二人がなかよく、かゞみで、うつしてあそびましたね。

子どもの頃、誰もがやった遊びである。しかしそれを綴方に書くうと思う子どもは少ないのではないか。木村寿の指導作品は、誰もが経験していることを経験だけに終わらせず、よく見つめさせている。「すいつちよん」もそうだが、よく考えさせている。

『綴方読本』昭和六年六月号には、小島政男の綴方「ねらみごっこ」が掲載されている。学年は二年となっている。小島政男は「すいつちよん」を書いた子どもである。したがって昭和五年度に書か

れたものが、学年はそのまま二年生として六年度の『綴方読本』に掲載されたのであろう。

ねらみごっこ

宮崎県東臼杵郡岡富小学校二年

小島政男

「だるまさん、ねらみごっこいたしませう、わるたらだめよ、うんとごっこいしよい」

いもうとは僕をにらんでわらはせやうとしましたので、僕は、目を白黒にさせてやりました。いもうとは

「なにくそ、まくるもんか」といつて、僕をねらみかへしました。そのねらみかたがをかしかったので、「あははは、ああをかしい」と、わらひました。

「又すうや」といひましたら、いもうとが「うん、又して、勝つてやるな」といひました。今度は、僕が勝たなきや、そんぢやといつて、ねらみました。

「うんとごっこいしよ」

僕は目をひがらめにして、わらはせやうとしたら、いもうとは「今度も負けんぞ」といひましたから、手をちよつと出して、くびをちよこぐつてやりましたら、「あゝちよこばい」と、わらひました。それで、ねらみつこは、しやうぶになりました。

〔評〕

1、「だるまさん、ねらみごっこいたしませう、わるたらだめよ、うんとごっこいしよい」といふ、あひづが、なかなかおもしろい。

2、いもうとさんは、なか／＼、げんきがありますね。

3、きみは、二どめにも、どうも、まけたらしいね。

4、すこし、ずるいことをしてゐますが、仲のいゝきやうだいだか

ら、こんなことをするのが、かへつて、おもしろいと思ひました。
いかにも、にらめつこらしくて、いゝ文です。

「評」にもあるように、兄妹の仲の良さが伝わってくるほどのぼ
とした綴方である。「ねらみごっこ」の「ねらむ」は延岡弁だろう
か。むろん「にらむ」の意味である。

昭和八年七月には、『綴方読本 尋常一年』に臼井壽雄の「ヒカ
ウキ」という詩が載っている。

ヒカウキ

宮崎県延岡町岡富小学校

臼井壽雄

ヒカウキ
ハイイナ
ウナリヲ
タテテ
ピカピカ
ハイイ
アヲヅラニ
ヒカッテイク
クモノナカニ
ハイリ ハイリ
ハイイ

(昭和八年七月号)

茅葺きの家が並ぶ村の一角から子どもたちが空を見上げている挿
絵と共に、二ページにわたって掲載されている。

この号は昭和八年七月一日に発行されている。したがって臼井壽

雄は昭和八年に尋常一年生のはずであるが、『綴方読本 尋常一年』
昭和五年十月号に「お月さん」という作品が選外佳作に入っており、
矛盾する。理由は分からないが、昭和四年度に書かれたものが八年
度に掲載されたのであろう。

このほか『綴方読本 尋常三年』昭和六年七月号には小野宮子の
詩が掲載され、三人が選外佳作になっている。

※『綴方読本 尋常三年』昭和六年七月号

とう番

宮崎県延岡町岡富校

小野宮子

えんがはを
日のあたたたえんがはを
ふいてもふいても
ひやがるばかり
ふいたあとから
すぐひやがる

【評】ほんきになつてとう番をしてゐるあなたのすがたがみえます。

*選外佳作

せんば烏 宮崎県岡富校 井上正信
えんしう 同 岡田 泉
かねこり 同 柳田つな子

これらも昭和五年度に書かれたものである。

前述したように、『綴方読本 尋常二年』昭和六年六月号には、
小島政男の綴方が二年生の作品として掲載されている。二年生の時、

即ち五年度に書かれたものが六年度に掲載されているのである。

昭和六年『綴方読本 尋常三年』七月号の選外佳作に入った「井上正信」は、同年『綴方読本 尋常二年』三月号に綴方「かがみ」を書いた子どもである。

したがってこれらの子どもは皆同級生である。つまりこれらの作品は五年度に木村寿の指導のもとに書かれた作品が、六年度の雑誌に三年生として掲載されたのである。

なお、『日本の子どもの詩 宮崎』（日本作文の会編）には、岡富小の作品が数多く再録されている。出典も無く、初出誌にあたることもできなかったが、参考までに挙げておく。

すずめとかがし

井上正信 小3

かがしが立った
にらんだかがし
すずめはにげる
しゃべってにげる
かがしの着物は
あかい着物
すずめはおどけて
にげている
かがしはくろ目で
にらんでる。

東臼杵郡岡富校

ニワトリ

ウチノ トナリノ ニワトリ

渡邊 通 小1

アメノ フルトキ チヂコマル

エサヲ ヤルト ウレシガル

ボクト イモウトト

ミテイルト

ニワトリ ボクタチ

ミテイルヨ

東臼杵郡岡富校

ジドウシャノアト

真武静丸 小1

ジドウシャガ

ハシツテイク

ジドウシャノアトカラ

ホコリガ

ポツポツト

アガリマス

東臼杵郡岡富校

きしゃなんごおんご

真武静丸 小2

きしゃの うんでんしゅは

ぼくよね

おきやくさんは

せいちゃん、ひろちゃんよね

しゅう しゅう

つき山ぐるぐる

なんべんもまわる

ていしゃば げんかん

しゅう がたん
ほうら つきました

東臼杵郡岡富校

あめふり

真武静丸 小2

あめが ふる。
あめが ふる。

もった かさに あめが ふる。

しづくが おちる。

ぼてん ぼてん

しづくが おちる。

かさを ながれて、しづくが おちる。

東臼杵郡岡富校

すべりだい

真武静丸 小2

上からつるつるつる

すべりだい

中々おもしろい

すべりだい。

上からつる、つる、つる

すべりだい

東臼杵郡岡富校

ほたる

臼井寿雄 小2

ほたる、

ぼかっと ひかった。

あおいろの

ひかり。

くらい 小やぶへ、

へって いった。

東臼杵郡岡富校

三、延岡小学校の文集『草の芽』

1、延岡小の作品

木村寿は昭和六年に延岡尋常小学校に移っている（延岡小は、この年高等科を廃止している）。一年生の担任である。当時の生徒である木谷靖氏や「宗 真」（現・長友）さんによると、一年生は東組、中組、西組に分かれていて、木村寿は東組の先生だった。延岡小学校にいたのは一年間だけだが、その間に文集『草の芽』を発行している。

「宗」さんは一年生の時に木村寿の学級だったが、四、六年生の担任は柴田清一で、綴方の時間や休み時間、雨の日などに『赤い鳥』を読んで聞かせてくれたという。

柴田清一は、『赤い鳥』で活躍した草川小学校で、学校文集『草川文苑』を編集していた人物である。延岡小では、文集『城山』（昭和九年）を出している。木村寿は当時の「県下綴方童詩教育人展望」（『宮崎県教育』）の中で柴田清一に触れ、「城山の真下延岡には、重厚な柴田君、専攻科の光を出さうとしてゐる。文集『城山』の一号を見る。生活指導の目標のもとに新綴方の工作をあざやかに示してゐる。或る意味に於て都市の文は骨抜きになつてゐるといはれてゐる。動脈を取りのぞいたやうな文に作り上げてゐるとよく批評をうける。この批評を、柴田君の熱と力と精進は打破して、都会

的特質を持つ作品と生活を構成するだらう。」と期待している。『城山』が何号まで続いたのかは分からない。

木村寿は『城山』を紹介した文の中で、延岡小を都市の学校と認識している。宗さんによると、延岡小は名門だったので、恒富あたりからの越境入学者もあり、生徒の人数が多くなったそうである。事実、延岡小の創立百周年記念誌の「思い出」には、自分は越境入学だったと書いている人がいる。旭化成があったことも関係しているであろう。当時の延岡小学校の生徒数を調べてみると、木村寿がいた昭和六年は八七三人で一八学級、翌七年が九八六人で二〇学級、木村寿が再度赴任した昭和十一年には生徒数一〇四八人、学級数は二三に増えている。

文集『草の芽』も見つかっていないが、岡富小と同じく、『綴方読本』に延岡小の作品を見ることが出来る。

昭和六年六月の『綴方読本 尋常一年』には、鮫島義昌の綴方「ハーモニカ」が掲載されている。

※『綴方読本 尋常一年』昭和六年六月号

ハーモニカ

宮崎県延岡町延岡尋常小学校

鮫島義昌

ボクハ ハーモニカヲ モツテキマス。オテテ ツナイデモ シ
ツテキマス。ナンデモ シツテキマス。ハーモニカハ ネルトキデ
モ フキマス。ウチニハ ハーモニカノ フシモ アリマス。トケ
イヲ モツテ ネマス。ホンモ モツテ ネマス。
イツトキ シマス。ネムツテ シマヒマス。
ソシテ オケテ ガクカウヘ キマス。カヘツテカラ マタ ハー
モニカヲ フキマス。

△キミハ タイヘン ハーモニカガ スキデスネ。ジャウズニ フ
ケマスカ。

△キミハ ジブンデ ハーモニカノ フシガ ヨメマスカ。

ピアノが一般家庭に普及していなかった時代、ハーモニカは手軽なこともあって、子どもたちの身近な楽器だった。戦前のこの時代、ハーモニカがどのくらいの値段だったのかは分からないが、木谷靖氏によると、それほど高い物でもなかったとのことである。宗さんも尋常三年生の時に音楽の先生から買わされたと言っている。

しかしこの綴方を読むと、少し得意げで、尋常一年生ではまだハーモニカを持っている子どもは少なかったのだらうと思わせる。ハーモニカが大好きで、大事にしている様子がうかがえる。

同じく昭和七年十二月号には綴方「スズムシ」が、昭和八年七月号には「アメフリ」が載っている。

※昭和七年十二月号

スズムシ

宮崎県延岡町延岡尋常小学校

首藤芳明

コナヒダノバン ボクガ スズムシノ ソバヘイツタラ リンリ
ン ナキマス。ボクガ ヲルマデハ ナキヨツタノガ ボクガ フ
ロヘヘツテ キイタケンドン ナキマセン。アガツテ ソバニ
イツテミタラ マタ ナイテキマス。スズムシハ ボクガ スキダ
ト オモヒマシタ。ボクガ ネルコロモ ナキマス。ボクモ スズ
ムシハ ダイスキデス。ババチヤンモ ダイチヤンモ ダイスキデ
ス。
スズムシニハ ナスヤ カキガ イレテアリマス。カキヤ ナス

ガ クサレルト ギイチヤンガ マタ イレカヘテヤンナリマス。
ソレジヤカラ スズムシハナクノデス。
スズムシハ カゴニイレテ マツノヨコニ カケテアリマス。ソ
シテ マイバン ナクノデス。ボクハ マイバン ネムリナガラ
ナキゴエヲ キキマス。スズムシハ ヒルモ バンモ ナキマス。
スズムシを飼っている人は多いだろうが、「スズムシハ ボクガ
スキダト オモヒマシタ」と、ここまで言い切れる人は少ないだ
ろう。スズムシは自分のために鳴いていると自信をもって言い切っ
ている。

※昭和八年七月号

アメフリ

宮崎県延岡町延岡小学校

真武弘之

キノフ、アメガ フツテ コマリマシタ。ウチノ中デ ケットボー
ルデ ヤキウノケイコヲ シマシタ。アイテシマツテ コンドハ
オダイドコロノ マドヲ アケテ ホシザヲヲ ミテキルト ツユ
ガ ナガレタト オモツタラ ピカツト オチマシタ。オチタト
オモツタラ マタ ナガレテキテ オチマシタ。オチタト オモツ
タラ マタ ナガレマシタ。ナガレタト オモツタラ マタ オチマ
シタ。ボクガ ミテキルアヒダ ツユガ イツマデモ ナガレテ
オチマシタ。

(筆者注 「ケットボール」には、「フットボール」というルビが
ついている。)

「オチマシタ。オチタト オモツタラ マタ」という繰り返し

いかにも一年生という感じである。「スズムシ」もそうだが、その
素朴な見方と表現が子どもならではの魅力である。

「スズムシ」(首藤芳明) は昭和七年、「アメフリ」(真武弘之)
は昭和八年の掲載で共に「尋常一年」だが、「ハーモニカ」を書い
た鮫島義昌も、首藤芳明も真武弘之も全員延岡小学校の昭和十一
年度の卒業生である。なぜこのように掲載年度がバラバラになったの
かは分からないが、卒業生名簿によれば皆同窓である。

このほか、延岡小学校の作品では、雑誌『綴方教育』掲載の菊池
知勇等の文章中に引用されたものが幾つか見られる。

※『綴方教育』第七卷第九号(昭和七年九月一日)

菊池知勇は『綴方教育』第七卷第九号に書いた「児童作品の鑑識
と指導：よき題材と表現と指導とをもとめる人々のために：」とい
う文章の中で、「主観語の削除」の例として、延岡小学校の子ども
の詩を引用している。木村寿の指導作品である。

スズメ

スズメノコガデキマシタ
スズメノコハマダトビマセン
スズメノコハカイデスヨ
チュチュナキマス。

(宮崎県延岡校 尋一 渡邊甲一)

雛になつたばかりの子雀に対する愛撫の心をとらへたところ、粗
末ながらも詩を見出してゐます。尋一の詩はまづかうしたものと思
つていいでせう。

「雀の子が出来ました」の「出来」は一寸問ひ返せば「生れ」と
いふでせうから、訂正させた方がよいでせう。「雀の子はかはい

ですよ」は、この詩の中心感動ですが、これは削って言外においても、他の事実からその心持が感じられることを知らせて、削らせた方がよいでせう。無理にわたらない程度で、はやくから正しい指導を加へて行かなければ、いつの間にか悪い型を作ってしまうものです。

菊池知勇は「雀の子が出来ました」は「生まれました」に訂正させた方がよいと言っているが、宮崎では「子ができた」という言い方が普通にあつたから、こういう表現になったのだろう。

「スズメノコハカハイデスヨ」は、ここではそのまま良いのではないか。「他の事実からその心持が感じられることを知らせて、削らせた方がよい」という菊池知勇の言葉も、「説明ではなく描写を」という表現上の問題としては分かるが、そうしたから詩として良くなるというものでもないだろう。「スズメノコハカハイデスヨ」の中には、そう言っている子ども自身の可愛さが表れている。作者の渡邊甲一も昭和十一年度の卒業生である。したがって昭和七年には二年生であり、この作品は前年に書かれたものである。

同年の十一月には、「児童作品の鑑識と指導」の中で、菊池は「うし」(西川英子)という詩を引用している。

※『綴方教育』第七卷第十一号

「児童作品の鑑識と指導」菊池知勇

動物へよする心

うし

のつばらに

牛がないてゐる

モーモーとないてゐる

子供がむかふのはうで

みてゐます。

(宮崎県延岡校 尋一 西川英子)

野原で鳴いてゐる牛を、おもしろさうに、おそろしさうに見とれてゐる、と、向ふにも同じやうに見とれてゐる子供があることを発見して、一層興味を感じたのでせう。幼童らしい感動をとらへたおもしろい題材です。

「牛が鳴いてゐる」「モーモーとないてゐる」といふくりかへしは、幼い子供にもかういふ風にいへるのでせう。大人だつてかうしかいへないことを思ふと、自然の発声はおそろしいものだと思ひます。「子供がむかふのはうで みてゐます」は先方の子供のことばかりいつて、自分を忘れてゐます。「子供が向ふの方でも見てゐます」として、自分をそこにあらはしておくべきところでした。

「野原で牛がモーモーと鳴いている。その向こうに牛を見ている子どもがいる」というのどかな情景描写である。対象はあくまで牛とそれを見ている子どもであつて、自分ではない。牛と、それを自分と同じように見ている子どもに関心があるのである。牛を見ている自分を描こうとしているわけではない。菊池知勇のように「子供が向ふの方でも見てゐます」とすると、自分が現れすぎるのではないか。どちらが良いかというより、微妙に違ったものになつてしまふということである。

西川英子の名前は、昭和十一年度の卒業生名簿には無い。昭和十二年度の名簿にも名前がないので、転校したのであろう。

昭和七年十二月『綴方教育』第七卷第十二号には、鵜澤覚の「児童への詩話」の中に渡邊甲一の「スズメ」が取り上げられている。

※第七卷第十二号

児童への詩話

鵜澤 覚

(略)

そうしたら、それを詩に書き表すにはどうしたらいいでせう？
それには、皆さんが見て感じたまま、聴いてかんじたまま、感じが胸にいつぱいになつて次々と叫ばずにはゐられない言葉のまゝにお書きなさい。

或日、雀の子が巣に生れてゐるのを見つけました。生れたてですからまだとべません。本当にかはいらしい雀の子。掌にのせても、巣に入れて置いても、小さいお口をいつぱいあけてチュ、チュつて鳴きます。本当にかはいい雀の子。雀の子を見て、そんな感じがしましたら、皆さんの見た通り、心持に強い感じを持った通りに書けばよいのです。こゝに一人の人が書いて来てあります。

スズメ

スズメノコガデキマシタ

スズメノコハマダトビマセン

スズメノコハカハイデスヨ

チュチュナキマス。

雀の子が出来ましたといふのは？ そうです。雀の子が生れましてといふことですね。(生れましたと書いた方がいゝですね)

一番始めに雀の子の生れた喜び、生れたのを見付けた喜びが心に

先ず起つたからその通り書いたのでせう。本当に見てゐればゐるほどかはゆくになるので、かはいいですよと書きました。チュチュナキマスもわかりますね。

この様に自分の思ひついたまゝに、心で叫ぶ通りに書いて行けばいいのです。

詩を書くには「見たまま、感じたまま、思ったまま」を書けば良いと低学年の子どもたちに教えているのだが、その具体的な例として使われているのである。「スズメ」はそれほど典型的な例だということだろう。

昭和八年二月号の「児童への詩話」(『綴方教育』)でも、鵜澤覚は「スズメ」を引用している。「行の切り方」の説明に使っているのである。

スズメ

スズメノコガデキマシタ。スズメノコハマダトビマセン。スズメノコハカハイデスヨ。チュチュナキマス。

鵜澤覚は「この様に書いてはいけません。」と言い、これが四行の詩になる理由を述べている。そして「行を分けるのはいい、加減に切るのではなくて、大体分けなければならぬ所で分けるのです。即ち、行を切る所は 1、息を切るところであり 2、書くこと(内容)の分かれ目のさかひの所です。」と結論づけている。「スズメ」は低学年の子どもに手本として示されているのである。

この「児童への詩話」では、「スズメ」が雑誌『綴方教育』に掲載されたものであり、そこから引用したことが記されている。何号に載ったのかは不明である。

『綴方教育』昭和八年一月号には、菊池知勇「児童作品の鑑識と指導」に、「感動の不純」の例として首藤芳明の「とけい」が引用されている。

※昭和八年一月号

感動の不純

とけい

とけいがかつちり

あさのあたらしい

へやで

とけいがかつちり

ぼくたちのへやはあたらしい

とけいのおとがいいね。

(宮崎県延岡校 尋一 首藤芳明)

菊池知勇は「朝の新しい部屋で時計の鳴つてゐる音は、どんなにか快いものでせう。さうした心持をとらへたことは一年生として大上出来です。」とほめた上で、「しかし、この表現はあまりにごたづいてゐます。感動が純一になつてゐないのです。」と述べている。「何かしら心を乱してゐるものがあるやうです。それが若しよい詩をつくらうとか、面白く書かうといふやうな考へからかうなつてゐるのだつたら、大へんよくないことです。」

「良い詩を作ろう」という作爲的な意識があつたかどうかはともかく、「感動が純一になつてゐない」という指摘は分からないでもない。題名は「とけい」であるが、この詩の「感動」は「自分たちの部屋が新しい」ところにある。部屋が新しくなった喜びで時計の

音も良い響きに聞こえるのである。時計と新しい部屋との関係が整理されていないというのであろう。

同年二月号には、同じく菊池知勇「児童作品の鑑識と指導」の中に、真武弘之の詩が引用されている。「題材の重点」という項目の中での引用である。

※昭和八年二月号

題材の重点

からす

からすかあかあ

あをぞらとんだ

まつくろいからすのはねが

ぴかぴかひかる

からすがかあかあ

あを空の中をとんでいく。

(宮崎県延岡校 尋一 真武弘之)

菊池知勇は「とんで行くからすの翅のひかりをとらへたところがおもしろいと思ひます。」と述べた上で、表現について次のように言っている。

「表現は二三行目『あをぞらをとんだ』は事実を忠実にいつてをりません。「あをぞらを」などいふ言葉はなくともよいから「とんでいく」といふべきでした。「あをぞらを」は少し巧みすぎて人真似くさくなつてゐます。最後の二三行も、いかにも童謡くさいくりかへしでない方がどんなに自然だか知れませんか。」

要するに、「とんで行くからすの翅のひかりをとらへたところが

おもしろい」のだから、そこを重点化した表現にすべきだというの
だろう。「最後の二行も、いかにも童謡くさいくりかへしで、ない
方がどんなに自然だか知れません。」と言っているが、問題は「か
あかあ」である。こういう類型的な表現（とらえ方）が、この詩を
童謡風に感じさせるのである。

更に、同年三月号にも菊池知勇の「児童作品の鑑識と指導」に、
篠田甲一の詩が二篇、井上弘の詩が一篇引用されている。

※昭和八年三月号

落花の瞬間の美

梅の花

梅のえだから
花びらがちつてくる
ちらちらと
えだのあひだを
ちつてくる。
あちらのくさに
こちらの土に。

(宮崎県延岡校 尋一 篠田甲一)

菊池知勇はこの詩の良さを、「梅の花が散ってくるとは、見ない
でも誰にもいへませんが、『枝から』『花びらがちつてくる』とは、よ
く見てゐた人にしてはじめていへる言葉です。ことに『えだのあひ
だをちつてくる』うつくしきは、一そうよく見てゐた人にしていへ
る言葉です。」と、「よく見てゐる」ところにあるとしている。的確
な評価である。

また、「『あちらの草に』『こちらの土に』はあまりに巧み過ぎ、
作り過ぎてこの作の純粹さを傷つけてゐます。この詩は枝から散る
うつくしさをとらへたところがよいのであつて、土におちつくところ
は自から別の景でなくてはなりません。」とも言っている。視点が
二分化し、焦点化されないことへの指摘である。

菊池知勇の「よしとする詩」は、作為が無く、具体的で、感動・
視点が焦点化されている作品と言えそうである。短詩になる理由が
ここにある。

子供らしい感じ

かいがら
かいがらふんだ
かいがらは
ぼくをしらずに
ざうりの下で
かさかさわれた
かいがらふんだ
すなの上。

(宮崎県延岡校 尋一 篠田甲一)

「かいがらは僕を知らずにざうりの下で」は子供らしいおもしろい
心持です。この詩のよいところはそこです。をはりの「かいがらふ
んだすなの上」はいらないつけたりです。

貝殻が「ぼくをしらずに ざうりのしたで かさかさわれた」と
いう発想は面白い。菊池知勇ふうに言えば、この詩はここに「感動」
が純化されている。それ故に終わりの二行も「いらないつけたり」

だというのである。

具体的な情景

つばき

つばきがおちた

子供がひろった

ささにとほして

あそんでる。

(宮崎県延岡校 尋一 井上 弘)

菊池知勇は『ささにとほしてあそんでる』はみちかいけれども、よくその情景をはつきりとらへてこの詩を生かしてゐます。」と評し、「しかし『つばきがおちた』は何といつても拙い。これは『つばきの花がちつた』としなければ美しさが感じられません。」と述べている。

しかしこれは、子どもにすれば、椿の花の重さを「おちた」と表しているのであって、椿の花に「散った」という感じはもともと無いのである。「ささにとほして あそんでる」のは椿の花一個一個を通してあるのであって、花びら一枚一枚を通してはじめてはい。菊池知勇の言葉を借りれば「よく見てゐる人にしてはじめていへる言葉」なのである。

なお、昭和六年の『綴方読本』七月号には、延岡小学校尋常三年柏谷義人の綴方「はいがとまつた」が入選している。

はいがとまつた

宮崎県東臼杵郡延岡小学校

柏谷義人

僕が学校からかへつてべんきやうをしてゐますと、はいが手や頭にとまつてゐた。僕はうるさかつたので「こんちくしょう」とおこつて手ではいを取らうとしますと、まどのがらすにとまつたから、ふでいれから小刀を取り出して、がらすにとまつてゐるはいを切らうとすると、机の上にとまつた。その早いこと、まるで鳥のやうであつた。僕が一しんにべんきやうをしてゐると、はいが来てあたまや、足にとまつて色々うるさかつたけど、僕は「はいは人げんところがふ、人げんの手やあたまにとまつても、人げんがうるさいといふことをしらぬものである」といつて、僕はがまんをして、べんきやうをしあげてしまひました。(四月二十五日)

〔評〕はいがとまつて、うるさくてくたまらないことが、ありますね。けれども、はいは、人げんが、うるさいのだといふことはしらないでせう。でも、そんな、じやまをするやつは、なぐりつけてやりたくなくてせう。

(『綴方読本』尋常三年 昭和六年七月号)

悟りを開いた禅僧が書いたような綴方で、おもしろい。「はいは人げんとちがふ、人げんの手やあたまにとまつても、人げんがうるさいといふことをしらぬものである」。確かに、そう考えれば、がまんできるのかもしれないが、なかなかそうはいかない。

柏谷義人は、延岡小『創立百周年記念誌』の名簿によれば、昭和九年度の卒業生である。したがって昭和六年度は三年生である。木村寿は、昭和六年度のみ在職であり、尋常一年生の担任だから、他に指導者がいたものと思われる。

一年生の作品にしても、ここに出てきたすべてを木村寿が指導したのかどうかは分からない。当時木村寿に習った宗(長友)真さんは、「真武弘之、鮫島義昌は東組で同級だった。渡邊甲一と首藤芳

明は同じクラスだったかどうかは覚えていない。西川英子は記憶にない。」という。西川英子についてはよく分からないが、当時は短期間で転校していく子どもたちもいたようである。篠田甲一も同級だが、井上弘は卒業生名簿には無い。

2、子どもたちが作った文集『草の芽』

宗真（長友）さんによると、文集『草の芽』は年間で十三冊ほど出たようである。最初は書ける子どもだけで作ったので薄かったが、皆が書けるようになると次第に厚くなり、十三冊目は二、五センチくらいの厚い物になったそうである。文集を作っていたのは東組だけで、他の学級にはなかった。これは隣の組だった木谷靖氏も認めている。

内容は主に綴方で、昼休みに弁当を持って城山に行くと、「城山に行ったことを書きましよう」と、題を出して書かせたりした。城山は内藤藩の城があった所で、当時の延岡小学校はその近くにあった。城山の下で、今の延岡市役所がある所である。

前述したように、小砂丘忠義は昭和六年二月の「文集展望」（『綴方生活』）の中で「全然子供の手で作るのではないが、例へば宮崎県岡富校の木村君のやつて『日の光』は表紙絵から挿絵すべて子供（二年生）の手になるものである。」と述べているが、宗さんはそれを裏付ける証言をしている。自分たちで文集を作ったと言っているのである。

宗さんによると、「日曜日に木村寿先生宅に行って、自分たちでガリを切って文集を作った。奥さんも岡富小の先生だった。先生宅で昼ご飯を食べた」そうである。

岡富小に続いて、延岡小でも子どもたち自身に文集を作らせているのである。しかもこちらは一年生である。小砂丘忠義は「文集を作ること綴方の一つの作業と見なして、すっかり子供の手作りで

上げるやうになりたいと僕は思ふ。」と述べているが、木村寿も同じ気持ちだったと思われる。

3、文字の指導

こうした文集を一年生でガリを切って作るには、当然相当の文字力が必要である。仮名をいつ書けるようになったかは覚えていないとのことだが、漢字の指導は印象的だったようである。昼休みにカルタ取りみたいにして漢字を覚えたのである。馬糞紙を十五センチくらいに切ったカードの表に漢字を書いて、裏にその読みがひらがなで書いてある。それを並べておいて、読める漢字のカードを、例えば「山」を「これはヤマ」と言ったらそのカードを取る。難しい漢字ほど後に残ることになる。

宗さんによると、木村寿は「素朴な人」だったという。その木村寿も僅か一年で延岡小学校を去り、土呂呂小学校へ赴任することになる。そして文集『光』によって全国にその名を知られるようになるのだが、そのきっかけとなったのが千葉春雄との出会いである。

四、転機をもたらした千葉春雄

1、千葉春雄との出会い

「私が千葉春雄先生を知ったのは、たしか昭和七年である。実いふと、私の本当の綴方生活は、此の時からはじまったといっている。それまでに、数年、自費を以て、文集などを作ってはゐた。而し今日のように、文集を以て教育するといふ様にはつきりした態度は持たなかった。只、綴方が、子供の生活を知るには、いいといふ漠然とした心のみであった。」（『綴方実践の開拓』）

木村寿は、千葉春雄との出会いによって綴方教育への道が開かれたことを、このように述べている。むろん、これまで見てきたように、それまでの綴方指導が「漠然と」していたわけではないが、木

村の中で綴方教育への意識が明確になったのである。

木村寿によれば、千葉春雄との出会いは、木村の指導作品を千葉がそれと知らずに「児童文の綴方の研究」の中に引用したことであった。千葉は昭和六年に宮崎に講演に来た時にも、話の中で「きり」という木村寿の指導作品を引用した。そこで木村は千葉春雄に手紙を書いたのである。

「私は、東京の人などが、人の指導作品を材料に物を書いたり、物を言ったりすることに妙な気がおこったので、私の指導作品であるといふことを、知って戴くつもりで手紙を書いたのであった。」

木村寿の手紙に対し、千葉は「はげまして、理解のある言葉」を寄せた。木村は「私は、一通の手紙にどれだけ精神が奮ひ立ったかわからない。又仕事が決して無駄な事ではなかったと思ふと、いっそ力づいて来た。」と言っている。

2、綴方「きり」

千葉春雄が宮崎の講演で取り上げたのは「きり」という作品である。千葉は『綴方生活』第二号（昭和四年十一月一日）に「いかに児童文を見べきか 児童文のもつ研究問題的意味（その二）」を書いているが、この中に「きり」と思われる綴方が載っている。尋常二年生の綴方で、作者名、指導者名はない。

きり

今日私がおきた時、かほをあらひにでたら、あたご山やまちなどが、きりでまっ白くなつて見えまして。その時川の方を見たら、松がかたちばかりになつて、うつくしくてゑのやうでした。きりの中の草のつゆは、金の玉のやうでした。私が学校に行く道で、きりのあるところに行くと、むかふへいつてしまつてゐました。さきにはあるが、じぶんのそばにはありません。きりはどんどんとけていく

のでせうか。人が行くと、そばにはありません。前に行く人はかけのやうでした。きりは、ばあつとちらばつてゐるが、上からくるきりもあれば、下から上るのもあります。きりがたつと、ゆきがふるやうに見えます。日がてるど、だんだんとはじめます。の田にきた時、こべれ山はまっ白く見えませんでした。

学校も白くてあんまり見えませんでした。なんでもちかくなると、はつきり見えますが、とほいところから見ると、見えません。学校にくると、なが田や、こむねが、まっ白くみえました。畠の中のでんしんばしらが、かたちばかりでした。杉や松は、上の方が見えるばかりです。高い山を見ると、はんぶん下は見えませんが、それから下はまっ白く見えます。そして、学校にはいつて、べんきようをしてでてみたら、きりはなくなつてゐました。

千葉の論文は、適語、不適語の問題を論じたものである。木村寿も千葉の講演について、「適語、不適語の問題で、不適語が、適語以上の役目をしてゐるといふ話をされて、『きり』を児童性のある文とされた。きりの中に地方名で私のゐた南方村に關係のあるのが二つ三つ出た。私の指導作品であるから無理もないのだ。」と言っているから、講演の時の「きり」は『綴方生活』に掲載のものと同じものである。

木村は「きりの中に地方名で私のゐた南方村に關係のあるのが二つ三つ出た」と言っているが、作中の地名や山を調べてみると、「の田」は「野田」、「なが田」は「永田」、「こむね」は「小峰」で、いずれも延岡市の地名である。「あたご山」は「愛宕山」である。標高二五三メートルで、「南方村」の南東に位置する。「こべれ山」は「こびら山」で、「高平山」と書く。当時は「こべれ」と発音していたのである。これだけの地名や山が一致するのだから、木村寿の言う「きり」が千葉の論文に引用されている作品であることは間

違いない。南方小学校での指導作品である。

千葉は、この文(「きり」)は「きりがたつ」以外は「きりの現象をいふに、たゞ一つの適語を使つたのみで、他は悉く不適語を用ひてゐる。」と指摘する。不適語とは、「きりのあるところ」「(きりが)むかふへいつて」等のように、常識から外れた使い方をしている語句のことである。そして、却つてその「不適語によつて、文に異常な価値をもち来してゐる」と言う。それは尋常二年生の子どもが霧のかかつた朝を見て「ある不思議を強く感じ」、それを表すのに適語がなく、自分なりの言葉、つまり不適語を使った。「その結果、文を具体的に」し、「作者の面目をそのまゝの力として、文に生力を与へ」たのである。自分の気持ち、「感じ」に最も近い表現だからである。

「仔細にこの文を読んできると、次第に味が出てくるのは不思議である。読めば読むほど、文の底から光がさして来る。」

千葉は、何の技巧もない地味なこの文章が魅力的なのは、田舎の子どもによくある「発生的な物の観方」をしているからだと言っている。

「田舎に育つた子供は、生まれながらにして、平凡、単調な環境におかれる。そして変化を求め余地といへば、考へることにあるだけだ。平面の考へ方を立体にして行くだけだ。この立体が、やがて、彼等の生活態度を発生的にする。」

発生的態度とは、立体的な物の考え方が物事を「原因にさかのぼつて考へさせる。結果を想像して考へさせる。」ことである。霧を見て様々に疑問を抱き考へる、そうした態度である。

「平凡、単調、尋常、地味である文が、何故つきない興味をそゝるかといへば、要は、さうした感じ、背後に、心の奥底で物を観る態度がかくされてゐるからだ。」

「人間が物を観る時にとつてほしい態度として、暗に誰もが望んで

るものをもつてゐる。」

千葉は「きり」をここまで評価しているのである。千葉春雄からの手紙は残されていないが、木村寿は「手紙をよんでみると、理解のある言葉に女の様な心持で泣いてゐた。」とまで言っている。初めて理解ある人物に出会つたという感激である。

言い換えれば、木村寿はそれまで綴方指導に「文字通り、不屈不撓の精神で日夜精進し」ていたにもかかわらず、その努力を認め、正当に評価してくれる人物がいなるとの思いに駆られていたのである。

大正十五年に南方小学校で初めて一年生を受け持つて以来、岡富小、延岡小と綴方教育を続けてきた木村寿であるが、周囲は必ずしもそれを評価してくれたわけではなかった。

「文集を作り、綴方的作業を二三年もやつてゐる中、人々は、綴方のみをやる男といふ様になつた。極端なのは、その他の事は、何もやらない男といふのもゐた。」

「数年誰も、綴方が、教育の材料になり得るといふことを理解してくれなかつた。文集でも、趣味で作るのだ、と云つてゐた。」

「コツコツと隅こに引込んでやるやうな仕事は、ともすれば、外形のみを飾る教育界では、認めもしなかつた。」(『綴方実践の開拓』木村寿はそれに対して)

「而し私は、その徒をかへりみず、反抗もせず、夜通しかゝつて、原紙を切つたり、文を読んだりした。綴方の作業をするために、一日の教科一つでもおろそかにはしなかつた。」

「而し認められないでも、綴方に真実をはき、教師を信用して、何もかも訴へて来るのをみると、ぐつとやらすにはゐられなかつた。」と言いながらも、

「認められない事は淋しいことであつた。」
と、心の内を明かしている

木村寿にとって千葉春雄は、初めて自分の綴方教育を理解し評価してくれた人物だったのである。

それに南方小学校で始めた「自然観察の綴方指導」が方向として間違っていないかったという確信を得た喜びである。更に、文章（言葉）の問題である。方言性の強い宮崎という地で綴方指導をしていた木村にとって、言葉の問題は大きかったはずである。それを「奥行きをもつてゐる文である」と評価されたのだから、進むべき方向に確信が持てたと思われる。

千葉春雄によって自分の実践を認められた喜びと自信が、土々呂小学校での実践へとつながっていくのである。

※校正段階で、木村寿所蔵の『綴方生活』第一号を見る機会を得た。引用された「きり」の上部には、木村寿の手で「片寄静一」と鉛筆書きがなされている。「きり」の作者は、片寄静一である。

付記 本稿は「宮崎県児童詩教育史」の第四部をなすものである。

木村寿が青木幹勇氏に与えた影響については、大内善一氏の「国語教師・青木幹勇の形成過程（1）―生活綴り方教師・木村寿との関わり―」（秋田大学教育文化学部紀要 教育科学第五四集）に詳しい。

大内氏は、「（木村寿は）『国語教師として仰ぎみるに足る人』、『ほんとうの教育がどういふ姿で行なわれるものであるかを身をもって示してくれた』木村さん以後これだけの実践人に会うことはついありませんでした」という青木幹勇氏の言葉を引用し、「これらの言葉だけを見ても、この木村寿という人物が青木氏に与えた影響の大きさを窺い知ることができよう。」と述べている。